

はじめに

この、「宗像消防フィロソフィ」は、今後、宗像地区消防本部がどのような考え方、どのような哲学をベースに消防行政を推進していくかを示す指針です。

私たちは、このフィロソフィを全職員で共有し、このフィロソフィが指し示す方向へ全職員の考え方を揃え、その考え方のもとにあらゆる判断を下し、消防行政を進めていかななくてはなりません。そして、このフィロソフィを、宗像消防の貴重な財産とし、守っていくと同時に、個々人の人生の指針として、これを活用していかなければなりません。

「宗像消防フィロソフィ」は、全ての項目が当たり前のことを述べていますが、よく考えてみると、実際にはできていないことの方が多いのではないのでしょうか。当たり前のことを当たり前にこなすのは、存外と難しいことなのです。「そんなの当たり前だ」と馬鹿にしない素直さ、謙虚さが必要であり、実行するには我慢強さも求められます。ですから、私たちは、いかに当たり前のことが当たり前にできていなかったかに、まず、「気付く」ことから始めていかなければなりません。

全職員がこの「宗像消防フィロソフィ」を共通の判断基準とすることで、私たちは心をつなげた信頼しあえる仲間となり、宗像消防は、職員が安心して誇りを持って働き、社会の進歩発展に貢献する組織となっていきます。また、この判断基準は、全職員共通の判断基準であるため、新人職員であっても消防長であっても変わりありません。組織経営を組織の長に任せるのではなく、職員一人ひとりが組織の長になったつもりで考え、学び、議論していくことで、「当事者意識」や「自分ごと」という意識が芽生え、本当に強い組織を創り上げていくことができるのです。

一方で、組織には、真面目にやらないことや否定的なことが「カッコいい」というような風潮もあるかもしれません。ともすると、真面目に議論する人に対して、「何言ってるだよ、そんな青臭い」と忌み嫌う人もいるかもしれません。しかし、「宗像消防フィロソフィ」では、真面目に、一生懸命働き、時には青臭い議論も交わし、本気で上司にもぶつかっていく、こういう姿を「カッコいい」と考えます。このような考えを貫くことで、消防行政を発展させ、地域住民とも永続的に良好な関係性を保つことができるようになるのではないのでしょうか。

フィロソフィは作っただけでは意味がありません。学んだだけでも意味はありません。実行してこそ価値があるものです。「宗像消防フィロソフィ」を真摯に、また繰り返し学び、自分の生き方や仕事の進め方がフィロソフィに沿っているかどうかを日々確認する必要があります。そして、職場の仲間と一緒に、繰り返し考え、議論することで、少しでもこの考え方を自分のものとし、それが行動に活かされるようにしてください。

宗像消防の未来は、「今、私たちが何を為すか」にかかっています。

①【人生・仕事の結果＝考え方×熱意×能力】

人生や仕事の結果は、「考え方」と「熱意」と「能力」の3つの要素の掛け算で決まります。この「熱意」と「能力」は、それぞれ0点から100点まであり、それを掛け合わせます。そうすると、能力はあるが「これくらいでいいや」と努力を怠った人よりも、自分には大した能力はないが「何としても市民の命を守り抜く」と思って誰よりも情熱を燃やして努力した人の方が、はるかに素晴らしい結果を残すことになります。

そして、これに「考え方」が掛かります。考え方とは、生きる姿勢であり、マイナス100点からプラス100点まであります。掛け算ですから、わずかばかりの否定的な考え方であったとしても、人生の結果はすべてマイナスになってしまいます。

能力や熱意とともに、人間として正しい考え方をもつことが何より大切になるのです。

※プラス方向の「考え方」とは？

『まず、常に前向きで、建設的であること。みんなと一緒に仕事をしようとする協調性をもっていること。明るいこと。肯定的であること。善意に満ちていること。思いやりがあって、優しいこと。真面目で、正直で、謙虚で、努力家であること。利己的でなく、強欲ではないこと。「足る」を知っていること。そして、感謝の心をもっていること』

(「京セラフィロソフィ」稲盛和夫〔著〕)

②【人間として何が正しいかで考える】

フィロソフィの根本にあるのは、「人間として何が正しいか」という尺度で考えることです。

「正直であれ」「うそをつくな」「人をだますな」「約束を守る」「他人を思いやる」といったような、子供の頃、親や学校の先生から教わった基本的な道徳観のことでもあります。「なんだ、あたりまえのことではないか」と感じるぐらい当然のことにも思えますが、実際にこのことを100パーセント実行できている人はいないのではないのでしょうか。

常に「人間として何が正しいか」を自らに問い、勇気をもって正しいことを貫いていくことが大切なのです。

③【美しい心をもつ】

何かを決めようとするときに、少しでも自分の都合を優先して考えてしまえば判断はくもり、その結果は間違った方向へ向かってしまいます。人はとにかく自分の利益となる方に偏った考え方をしてしまいがちです。みんながお互いに相手への思いやりを忘れ、「私」というものを出していくと、周囲の協力も得られず、仕事はスムーズに進んでいきません。

ある哲学者は、人の心には「善い心」と「悪い心」が同居していると言っています。

「善い心」とは、思いやりと愛に満ちた、市民や仲間など他人を思いやる「利他の心」で

す。一方、「悪い心」とは、「自分だけよければいい」といったエゴに満ちた「利己の心」です。

私たちは、自分の心の中に、少しでもこの「善い心」を増やし、「悪い心」を減らすよう努力しなければなりません。

自分だけのことを考えるのではなく、まわりの人のことを考え、思いやりと愛に満ちた美しい心をもつように努力していけば、必ず素晴らしい人生を歩んでいけるのです。

④【常に謙虚に素直な心で】

人間の心は、自分の欲望を満たそうとする利己的な側面をもっています。そして、何か問題が起されば、自分を責めるよりも他人を責めたがります。人から注意されること、指摘されることは、誰にとってもつらいことです。「そんなはずはない」「そんなつもりはない」と自己弁護しがちです。

しかし、その気持ちを抑えてまずは謙虚に受け入れてみましょう。そうすれば何か自分に問題があることに気付くのではないのでしょうか。

自分にとって耳の痛い言葉こそ、本当は自分を伸ばしてくれるものであると受け止める謙虚な姿勢が重要です。

私たちは、常に謙虚に素直な心で、自らを反省し、あるべき姿を目指して努力することが必要です。そのような心をもつ人は、他人のアドバイスを素直に受け入れることができ、乾いた砂が水を吸い込むように、多くのことを吸収し、成長・進歩を遂げることができるのです。

⑤【常に明るく前向きに】

自分の未来に希望を抱いて、明るく積極的に行動していくことが、仕事や人生をより良くするために大切です。

人生においては、一生懸命努力してもなかなかうまくいかないこともあるかもしれませんが。しかし、そのとき、理由を外に求めて不平不満を言ったり、人を恨んだり、憎んだり、妬んだりしてはいけません。ピンチも自分を成長させるチャンスととらえ、明るく前向きに真正面から困難に挑戦していくのです。どんな現象でも見方によって、マイナスに受け止めることもできれば、プラスに受け止めることもできます。

まさに自分の心の持ち方次第で結果は変わっていくのです。

私たちが常に明るく前向きな気持ちであれば、災害や事故による被害者の方に少しでも多くの安心感を与えることができます。また、一緒に働くまわりの仲間にも笑顔が広がり、安心して仕事に取り組む職場環境を創り上げることができます。

⑥【ものごとをシンプルにとらえる】

私たちはとすると、ものごとを複雑に考えてしまう傾向があります。しかし、ものご

との本質をとらえるためには、実は複雑な現象をシンプルにとらえ直すことが必要なのです。ものごとは単純に考えれば考えるほど、本来の姿、すなわち真理に近づいていきます。

例えば、一見複雑に思える消防行政も、突き詰めてみれば「災害をゼロに、被害を最小限に、全ての人命を守り抜く」という単純な原則に尽きるのです。

いかにして複雑なものをシンプルにとらえ直すかという考え方や発想が大切です。私たちの日々の仕事の中にも、複雑だと思い込んで難しく考えてしまっている部分が必ずあります。表面的な事象に惑わされることなく、ものごとをシンプルにとらえれば、本質を踏まえた正しい判断ができるのです。

⑦【対極をあわせもつ】

大胆さと細心さ、合理性と人間性、やさしさと厳しさ、どれも一見、相反する性質ですが、人はこの両極端をあわせもち、正常に機能させることによって、初めて完全な仕事ができるようになります。

この『対極をあわせもつ』ということは、「中庸」をいうものではありません。どちらかに偏ってもいけませんし、足して2で割った真ん中をとるということでもありません。この両極端を兼ね備え、場面に応じて必要な性質が使い分けられるように心がけていくことが大切です。

大胆であるべきときに大胆であり、細心であるべきときに細心でなければならないのです。また、目標に向かい計画を立てる際には、徹底的に論理的に考える合理性が必要であり、それを達成するためには、誰からも親しまれる豊かな人間性により、周囲の人を巻き込むことが必要なのです。

この両極端を最初からあわせもつのは難しいことですが、仕事を通じていろいろな場面で常に意識して心がけることによって、次第に兼ね備えることができるようになるのです。

⑧【真面目に一生懸命仕事に打ち込む】

一生懸命に働くということは、勤勉であるということであり、仕事に対する態度が常に誠実であるということです。

人の一生の中で最も大きなウエイトを占める仕事において充実感が得られなければ、結局は、何か物足りなさを感じることになるはずです。もちろん仕事だけが人生ではなく、趣味や娯楽も必要だと思います。

しかし、本業に真面目に、真剣に打ち込むことによって、ものごとの本質をつかむことができるようになり、プロとしての仕事を全うできるのです。また、仕事に真面目に一生懸命打ち込み続けていくことで部下を守っていく、家族を守っていく、そして市民を守っていくことができ、自らの人格を高め、自分の人生をより良いものにしていけることができ

るのです。

「真面目である」とは、あなたの中に眠っている「本当の姿」を呼び起こす小さな勇気をもつことです。あなたがその「本当の姿」を思い浮かべることができるということは、あなたにはその姿を実現することができるということです。

⑨【地道な努力を積み重ねる】

どんなに偉大なことも、地道な努力の一步一步の積み重ねでしか達成できません。人生において大きな仕事を成し遂げようとした場合、一気に目的地にたどり着けるような便利な方法はないのです。

しかし、地道な努力を続けるといっても簡単ではありません。私たちは「こんなことを続けていて何になるのだろうか。このままでは全く進歩がないのではないか」と思ってしまいがちです。

そのようなときでも、地道な努力を続けていくためには、「仕事を好きになる」ことが大切です。「惚れて通えば千里も一里」というように、好きな人に会いたいと思えば、千里の道のりですら苦ではなく、一里にしか感じられないということです。仕事を好きになれば、傍からは苦勞と見えることでも、本人には苦勞ではなくなります。

私たちは、消防が好きで、消防に集った仲間です。日々の仕事の中ではつらく感じるときもあるかもしれませんが、消防吏員を拝命したときの気持ちを思い起こして、地道な努力を積み重ねていきましょう。それが必ず私たちを成長させるのです。

毎日苦勞を重ねていく中で、思いがけず市民の皆様からかけていただく、励ましやお礼の言葉に胸が熱くなった人もいるでしょう。このような市民の皆様からの激励や感謝の言葉も、一生懸命仕事に打ち込み、地道な努力を続ける原動力となるのです。

⑩【自ら燃える】

物に自燃性、可燃性、不燃性のものがあるように、人間も3つのタイプに分類することができます。自分で燃え上がることができる自燃性の人、火を近づけると燃える可燃性の人、火を近づけても燃えない不燃性の人です。

何かを成し遂げようとする人は燃えるような情熱をもつ自燃性の人でなければなりません。困難に直面したときにこそ不屈の闘争心をもち、目標に向かって自ら燃え上がるのできる人が組織には必要です。

反対に不燃性の人がいる組織は、全体で燃え上がることができず、必ずどこかで行き詰ります。

仕事に対して純粋で燃えるような情熱をもてるかどうかは、その人の本気度を表していると言ってもいいでしょう。

私たちは、一人ひとりが真剣に仕事に取り組む燃える集団でなければなりません。自ら燃え上がり、さらには有り余ったエネルギーを仲間にも与えることができる自燃性の人と、すくなくとも一緒になって燃え上がるのできる可燃性の人との集団であれば、必ず

ものごとを成し遂げることができるのです。

また、自ら燃えるためには、消防の仕事を好きになるとともに、消防の使命や責任を真摯に考える必要があります。

⑪【一人ひとりが宗像消防】

将来にわたって宗像消防を素晴らしい組織にしていくためには、私たち一人ひとりが、それぞれの持ち場、立場で自分たちの果たすべき役割を精一杯やり遂げていくしかありません。

誰かがやってくれるだろうと眺めているだけの「傍観者」や、批判のコメントばかりして自らは動かない「評論家」ではいけません。まず自分自身の果たすべき役割を認識し、自ら努力してやり遂げるという姿勢をもたなければならないのです。

職場でも、普段の暮らしの中でも、私たち一人ひとりの立ち居振る舞いが、そのまま宗像消防のイメージへとつながっていきます。

未来は「今、私たちが何を為すか」にかかっています。

もしあなたが思いやりのある優しい心を忘れて行動するなら、宗像消防は優しさのない組織になってしまいます。

もしあなたが宗像消防を素晴らしい組織にしたいと願い、自分自身の役割を認識し、自ら考え行動して、努力を重ねていけば、宗像消防は願ったとおりの素晴らしい組織へと変化していきます。

あなたが思い、願う「変化」に、あなた自身がなるのです。それがこれからの宗像消防の新しい歴史を創っていく、まさに私たち一人ひとりが宗像消防なのです。

⑫【本音でぶつかれ】

責任をもって仕事をやり遂げていくためには、その仕事に関係している人たちが、「今の仕事をもっと良いものにしたい」、「もっと良い組織にしたい」という前向きな姿勢で、それが例え上司に対してであっても、問題点を本音で遠慮なく言える風土が必要です。

日常の業務の中で、ものごとを「なあなあ」で済まさず、「どこか変だ」「何かおかしい」と感じたときには、互いにそれを指摘しあいましょう。

絶えず「誰が正しいか」ではなく「何が正しいか」に基づいて議論することで、本音でぶつかることができます。問題点に気付いていながら、周囲との軋轢や人に嫌われることを恐れて、それを指摘せずに穏便に済ませ、和を保とうとするのは大きな間違いです。

建前や常識論で良い仕事ができるわけがありません。勇気をもって、本音でぶつかり、本音で指摘しあう風土を作っていくことが大切です。

「宗像消防をもっと良くしたい」という善意に基づいて、本音で語り合っていけば、お互いの理解も深まり信頼関係が築かれて、素晴らしい仕事ができるようになるのです。

⑬【私心のない判断を行う】

何かを決めようとするときに、少しでも私心が入れば判断はくもり、その結果は間違った方向へ行ってしまいます。

人はとかく、自分の利益となる方に偏った考え方をしてしまいがちです。それはなぜかというと、人間には自分を守ろうとする本能があるからです。人間にこの本能があることを理解し、直感的な判断を一旦抑え、「自分というものを無にしてものごとを考える」つまり、『私心のない判断を行う』ことで客観的に正しい判断をすることができます。

反対に、みんなが互いに相手への思いやりを忘れ、「私」というものを真っ先に出していくと、周囲の協力も得られず、仕事がスムーズに進んでいきません。また、そうした考え方は集団のモラルを低下させ、活動能力を鈍らせることにもなります。

私たちは日常の仕事にあたって、自分さえよければという利己心を抑え、人間として正しいか、私心をさしはさんでいないか、「動機善なりや、私心なかりしか」と繰り返し唱え、常に自問自答しながらものごとを判断していかなければなりません。

⑭【率先垂範する】

仕事をするうえで部下やまわりの人たちの協力を得るためには、率先垂範でなければなりません。人の嫌がるような仕事も真っ先に取り組んでいく姿勢が必要です。どんなに多くの、どんなに美しい言葉を並べたとしても、行動が伴わなければ人の心をとらえることはできません。自分が他の人にしてほしいと思うことを、自ら真っ先に行動で示すことによって、まわりの人たちもついてきてくれるのです。

特にリーダーは「後方でドンと構える」ことが定石とされていますが、自らの目で現場を見ることも重要です。しかし、ずっと現場にいては大局を見誤る恐れがあるため、臨機応変に前線と後方を行ったり来たりすること「対極をあわせもつ」ことを心掛ける必要があります。

率先垂範するには勇気と信念がいりますが、これを常に心がけ実行することによって、自らの人間性や能力を高めていくこともできるのです。人の上に立つ人はもちろんのこと、すべての人が率先垂範する職場風土を創っていきましょう。そうすることで、全職員がいきいきと働ける組織になっていけるのです。

⑮【組織の垣根を越える】

組織においては、自部門の仕事なのか、それとも他部門の仕事なのか、担当部門がはっきりしない仕事もあります。そのようなときに、その仕事は自分には関係ないと思うのではなく、当事者意識、問題意識をもち、自分から手を挙げ、自分から言い出して、周囲の人たちを巻き込んで仕事をしていくのです。

また、他部門の仕事にはなかなか口を出しにくいものですが、組織目標を達成するために必要であれば、あえて垣根を越えて指摘しあう、新たな視点を提供する、アイデアを交

換するなど、組織の多様性を生かす視点に立つ必要があります。

宗像消防をより良いものとするためには、部門に関係なく、垣根を越えて指摘しあえる風土を創り上げることが重要です。

⑯【尊い命をお預かりする仕事】

私たちは、市民の身に降りかかる危険を排除し、安全な状態に助け出すため、他の何よりも重い大切な命をお預かりし、業務を遂行しています。消防の活動では、市民の命だけでなく、私たち職員の命も影響してきます。

過去の災害を振り返ると命の大切さ、尊さ、私たちの為すべきことを再確認することができます。私たちは、過去のあらゆる災害を教訓に安全に対する意識の向上に努めていくことが必要です。

私たちは常日頃から「安全管理」という言葉を口にしますが、毎日の業務の中で常に「安全管理」について問い続け、探求し続ける必要があります。

そのためには、災害活動時の安全管理だけではなく、未来の誰かの命を救うこととなる予防業務も含め、すべての消防業務を総動員した、総合的な安全管理体制を機能させていくことが重要です。

⑰【感謝の気持ちをもつ】

私たちが今日あること、そして存分に働けることは、市民の皆様はもちろん職場の間、家族といった周囲の多くの人たちの協力やサポートがあるからこそです。そのいずれかが欠けても今の私たちはないはずです。そのことを常に心に留めて毎日を過ごしていくことで、周囲のあらゆる人に対して、自ずと心から感謝の気持ちが湧き出てくるようになるのです。

また、謙虚な姿勢を忘れていないか、心からの感謝の気持ちをもっているのか、常に自分自身を振り返ることが大切です。形だけの「ありがとう」は相手に伝わるものではありません。

常に謙虚で素直な気持ちを持ち、周囲の人に感謝することは、毎日の仕事を、そして自分自身の人生を明るく、幸せなものにするのです。

⑱【市民目線を貫く】

私たちは、日常において何を原則とし消防業務を遂行しているでしょうか。

事業ひとつを計画する、または成し遂げるためには、その原理原則として「正しい考え方」であることが必須となります。

しかし、ともすれば、自らの利益を考えたり、少しの困難を理由にしたりといった、後ろ向きな考えが頭によぎることで、事業を前に進めることを拒んでしまうこともあるのではないのでしょうか。

ここで、最もシンプルな指標となるのが市民目線を貫くことです。常に市民の利益を考えることで、自分が為すべきことがくっきりと浮かび上がり、多少の困難は乗り越えることができるのです。この原理原則をもとにすべての業務に打ち込むことは、モチベーションの源泉となり、自らの人間性を高めることとなります。

最良の消防行政を提供していくためには、市民目線を貫くというごく当たり前のことに常に立ち返ることが重要です。

⑱【採算意識を高める】

私たちの予算資源は、市民の税金によるものです。

私たちは、そのことを念頭に置き、公務員として常に強い採算意識をもたなければなりません。

そのためには、私たち全員が普段から行政経営に参画しているという強い自覚をもち、常にコストを意識して業務に取り組んでいくことが重要です。

「この装備や資機材はいくらなのか」、「この業務に人件費はどれぐらいかかっているのか。もっと人や時間をかけないで実施する方法はないだろうか」、「この経費は住民のためとなるものなのか、職員の自己満足となっていないか」、そういったことに常日頃から関心をもち、採算意識を高めていく必要があります。

⑲【最高のバトンタッチ】

私たちは、心から信じあえる仲間づくりを目指し、これをベースに仕事をしていきます。ここでは、権力や権威に基づく上下関係ではなく、志を同じくした仲間が心をつなげて行動するという横の関係が基本となっています。

私たちの仕事の中心は現場です。その現場活動が円滑になるよう、また、職員が安心して現場活動に専念できるよう、本部職員は縁の下で支えています。火災現場や救助現場では、消防隊員や救助隊員が要救助者の救命率を最大限に高めるため迅速に救出し、救急隊員につながります。さらに救急隊員は、適切な病院で高度な処置を受けるまでに可能な限りの救命処置を施し、医師につながります。

毎日の災害活動は、まさにこの仲間がバトンをつなぐように実現されていくのです。ですから私たちは、常に次にバトンを受け取る仲間のことを思い浮かべながら、部門や職種を越えてどう連携できるかを考えてみましょう。ちょっとした工夫や思いやりが、次の仲間さらに頑張る気持ちを与えるのです。「最高のバトンタッチ」ができるよう、全員が心をつなげて、仲間を信頼し、思いやりの心をもってサポートしていきましょう。

私たちが志を同じくした仲間として、共通の目的に向かって一丸となって邁進することで、市民にとって最高のサービスが生み出されるのです。

⑳【ベクトルを合わせる】

消防活動において、個人プレーで得られる成果は大きいものではありません。職員がバラバラな考え方のままで行動したら、力が分散してしまい、1+1が2にも及ばないからです。しかし、職員全員が同じ考え方をもち、その力を結集すれば、何倍もの力となって驚くような成果を生み出します。1+1が2ではなく、5にも10にもなるのです。

常に価値観を共有して、全員のベクトルを合わせ、共通の目標に向かって全員の力を一致させることで、目標の達成がより確実なものとなっていくのです。

しかし、全員のベクトルを合わせることは容易なことではありません。ベクトルを合わせるためには、全職員が「人間として何が正しいか」という尺度をもち、どれだけ時間がかかっても、とことん対話をする根気が必要です。

有事に迅速な決断を下すためには、平時に時間をかけてでもベクトルを合わせておくことが重要です。

②②【実力主義に徹する】

組織を運営していくうえで最も重要なことは、それぞれの組織の長に本当に力がある人がついていることです。本当に力がある人とは、職務遂行の能力とともに人間的な魅力があり、部下から尊敬され、部下との間に信頼関係を築ける人です。そして、自分のためではなく、みんなのために自分の力を発揮しようとする人です。こうした人が組織の長として機会を与えられ、その力を十分に発揮できるような組織風土でなければなりません。こうした実力主義によって組織の運営が行われれば、その組織は強化され、最終的にはみんなのためになっていきます。

年齢や経歴に関わらず、仕事を遂行する能力を高め、人格を磨き、真の実力をつけていった人こそが、リーダーとなる資格があるのです。

②③【強い持続した願望をもつ】

高い目標を達成するには、まず「こうありたい」という強い、持続した願望をもつことが必要です。どんな目標であっても、まず「何としてもやり遂げたい」という思いを心に強烈に描くのです。純粹で強い願望を心に抱いて、寝ても覚めても、繰り返し繰り返し考えていると、次第に潜在意識まで深くしみこんでいき、自分をその願望を実現する方向へと自然と向かわせてくれるのです。

「目標が達成できないのではないか」という疑念を払拭し、「こうありたい」という願望を「気高く、強く、一筋に」思い続ける。そうすれば、どんなに高い目標も必ず達成できるのです。

高い目標を掲げても、「そうは思うが、現実には難しい」という気持ちが少しでも心の中にあっては、ものごとを成就させることはできません。自分が信じてもないことに、本気で努力などできないからです。

「まず思う」こと、それがすべての始まりなのです。

②④【成功するまであきらめない】

私たちの最大の弱点はあきらめることにあります。

人間は弱いもので、計画を達成できないという思いが出てくると、一生懸命理由を探して達成できないことを正当化しようとしします。

困難な状況に遭遇したとしても、決して逃げたり、あきらめたりしてはいけません。成功するまで「まだ何か方法がある」と考え方を換え、必死に努力を続ければ、結果として失敗することはなく、必ず計画を成し遂げることができるのです。

また、「何としても」という強い思いをもち、真摯な態度で懸命に努力を続けていると、普段見過ごしていた現象にハッと気づき、解決の糸口が見つけれられるものです。

成功するには、自分の可能性を信じ、「執念」とも呼べるような「熱意」をもって、粘り強く、泥臭く、最後まであきらめずにやり抜くこと、つまり「成功するまであきらめない」ことが必要です。

特にリーダーは、燃えるような闘魂をもって、「必ずやり遂げてみせる」という強い意志で、目標の達成へと導いていく必要があるのです。

②⑤【真の勇気をもつ】

仕事を正しく進めていくためには勇気が必要です。普段私たちは、周囲の人から嫌われないように、言うべきことをはっきりと言わなかったり、正しいことを正しく貫けなかったりしてしまいがちです。困難な道の方が正しいとわかっていながら、結局安易な道を選んでしまい、後になって「勇気をもって正しい道を選ぶべきだった」と悔んだりするので

す。

私たちは一般的に、困難なことや新しいことに対して、リスクも顧みず勇猛に、自ら進んで手を挙げて取り組もうとするような人を勇気のある人と思いがちです。

しかし「真の勇気」とはそういった豪傑と言われる人のもっている勇気とは違います。

「真の勇気」とは、状況を冷静に判断し、リスクも十分理解したうえで行動する人が、場数を踏むことで身に付けたものであり、最後まで信念を貫くことができる人がもてるものなのです。

特に安全に関しては、私たちには「臆病者と言われる勇気をもて」「迷ったら安全をとれ」という言葉があります。たとえ一時的に非難されることがあっても、私たちは、尊い命をお預かりしている使命感、責任感をもって行動しなければなりません。これも「真の勇気」なのです。

②⑥【昨日よりは今日、今日よりは明日】

私たちは日々同じ仕事を一生懸命繰り返していればいいと思いがちですが、そうではありません。与えられた仕事を一生懸命行うことは大切ですが、漫然と同じことを繰り返

ていてはいけません。

それぞれの職場で、全員が創意工夫を続け、常に新しく創造的なものを生み出して、付加価値を高めていかなければ、多様化・複雑化する災害に対応していくことはできません。

そのためには、毎日の仕事の中で、常に「なぜ」という疑問をもち、「もっと良い方法はないだろうか」ということを考え続けることが大切です。どんな職種・仕事にも、まだ改善・改良の余地はあると信じ、「昨日よりは今日、今日よりは明日」と、常に創意工夫を重ねるのです。今の仕事に満足してしまうのではなく、ほんのわずかな改善・改良でも、日々積み重ねていくのです。

そのような一人ひとりの小さな創意工夫の積み重ねが、素晴らしい進歩につながり、市民サービスを高めていくのです。

②⑦【楽観的に構想し、悲観的に計画し、楽観的に実行する】

新しいことを成し遂げるには、まず「こうありたい」という夢と希望をもって、楽観的に目標を設定することが何よりも大切です。新しいこと、革新的なことをしようとするときに、それがどのくらい難しいことかを先に頭で考えてしまって、結局何にも取り掛かることができないのでは成功などありえません。まずは着手しなければ何も始まらないのです。

自分たちには無限の可能性があると信じて、「必ずできる」と自らに言い聞かせ、自らを奮い立たせ構想するのです。

しかし、計画の段階になったら、「何としてもやり遂げなければならない」という強い意志をもって、慎重に構想を見つめ直すことが大切です。どこにどのような障害があるのか、起こりうるすべての問題を想定して、対応策を慎重に考え尽くし、準備を万端にしなければなりません。そうして実行段階においては、腹をくくり、「必ずできる」という自信をもって、楽観的に明るく勇気をもって実行していくのです。

②⑧【果敢にチャレンジする】

人はつつい現状に満足し、変化を避ける傾向があります。しかし時代の変化とともに、市民の期待・ニーズも変化していきます。私たちも、過去にこだわることなく進化し続けなければ、組織の発展どころか維持さえもできません。市民のニーズを果敢に先取りして、常に新しい価値を創造していくことが不可欠なのです。

チャレンジとは高い目標を設定し、現状に満足せず、常に新しいものを創り出していくことです。チャレンジには、いかなる困難にも立ち向かう勇気、どんな苦勞をもいとわない忍耐と努力が必要です。

失敗を恐れず、全く新しいことをやってみる。「宗像消防は常に進化している」と言われるぐらい新しいことに果敢にチャレンジしていきましょう。

～後世へ遺すもの～

私たちは、このフィロソフィにおいて明示した原理原則に基づき行動し、このフィロソフィの項目を日々自らに問いかけ、後世につないでいくことがとても重要であり、またとても困難であることを理解しなければなりません。

私たちが、このフィロソフィの精神で消防行政を推進していても、なかなかうまく進まないこともあるかとは思います。しかし、悲観的になることはありません。

私たち自らが「種」であるときは、「花」が咲き、「実」となることを完全に想像することはできません。また、「実」となったとしても、自分が何を成し遂げることができたのか、その真価を自らが知ることはできません。私たちは、ただ、為すべきことをことごとく為すのみです。

私たちは、たとえ後世の人に遺すものは何もなくても、たとえこれぞという覚えられるべきものは何もなくても、「あの人は、市民のため仲間のため、真面目なる生涯を送った人である」と言われるだけのことを、後世の人に遺していくことができれば良いのではないのでしょうか。